

#33 人生100年時代の住まい

# 私たちが目指す 「幸せ住まい」とは？

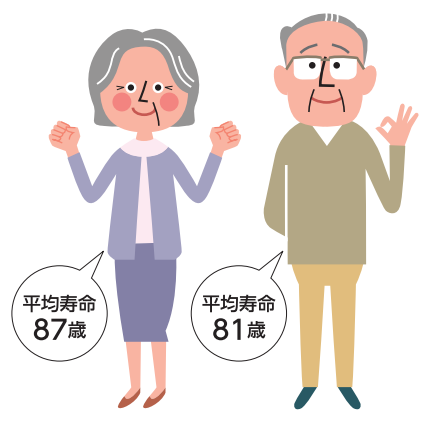


gm誌「生活リテラシー」の掲載は今号で第33回目、2008年のスタートから10年以上の長寿連載です。  
この誌面で皆さまにお届けしているさまざまな情報の礎になっているのが、積水ハウス・総合住宅研究所での研究成果。  
長年にわたってリアルな暮らしの姿を見つめ続け、多角度からの生活研究で得たノウハウを発信しています。  
そして、今後もさらに研究を深化させ、有益な情報を発信すべく、  
2018年8月に総合住宅研究所内に『住生活研究所』が設立されました。  
企業では日本初の「幸せな住まいを研究する研究所」として、すでに新たな一歩を踏み出しています。  
そこで今号では、新生『住生活研究所』が取り組む  
「人生100年時代の幸せ住まい、についてその一端をご紹介します。」

## 目指すのは 「住めば住むほど 幸せ住まい」。

今や日本人の平均寿命は、男性81・09歳、女性87・26歳(2017年簡易生命表/厚生労働省)。2007年生まれの日本の子どもは107歳まで生きる可能性が50%あるという研究報告もあり、まさに「人生100年時代」が訪れようとしています。  
100歳まで生きることが当たり前前の時代になれば、人生設計は大きく変わり、生活の器・住まいの在り方もずいぶんと違ってくることでしょう。住生活研究所では、そんな人や社会の変化を見据えた住まいづくりはあるべきか、これまでの研究成果を活かしながら「住めば住むほど幸せ住まい」の追求に取り組みはじめています。  
実は、この研究テーマ「住めば住むほど幸せ住まい」には大きな2つの思いが込められています。1つは「時間軸で住まいを見渡す(住めば住むほど)」ということ。もう1つは「住まいによって幸せを創造する(幸せ住まい)」という思いです。  
それではまず、「幸せ住まい」の研究についてご紹介していきます。

## ■人生100年時代の到来?!



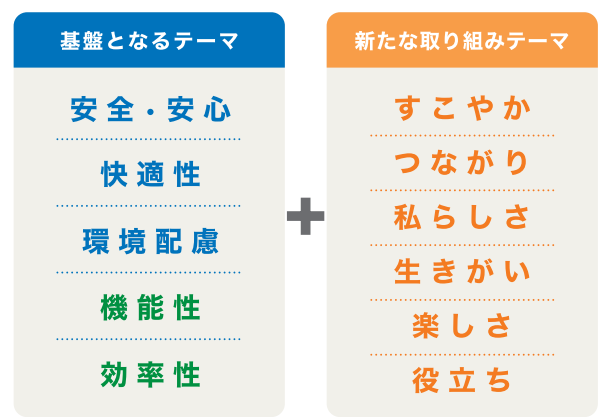
### ■住生活研究所のメインテーマ



## もっと住まいの 「無形価値」を高めていく。

「幸せ住まい」研究は、従来の取り組みと何が違うのでしょうか。これまでは住まいの「安全・安心」「快適性」「機能性」などを中心にした研究開発でしたが、これらに新しいテーマを加えて、より幅広く「幸せ」を創造していくのが「幸せ住まい」研究です。  
心身の「すこやかさ」「家族や友人とのつながり」「私らしさ」や「生きがい」など、いわば「無形の価値」を住まいによって提供することを目指しています。誰の目にも見える確かな価値だけでなく、住まい手それぞれによって異なり、必ずしも形として見えない価値も備えあわせてこそ、本当の「幸せ住まい」が実現すると考えています。

### ■「幸せ住まい」研究の枠組み



## 「ふだんの暮らし」にこそ、「幸せ」がある。

ところで「幸せ住まい」と聞いて、どのようなシーンを思い浮かべるでしょうか。たとえば、手間のかかることは全自動でこなし、家事はすべてロボットにまかせて、家族はのんびりと休養三昧……。そんな未来的(?)な暮らしも幸せの1つかもしれません。ただ、何もかもオートメーションになりすぎると、日々の暮らしの喜び自体を手放してしまうことにもなるのではないのでしょうか。  
夫婦や親子で「一緒にいろんな作業を手伝いあったり、互いに感謝しあいながら暮らすこと」で、幸せの実感は大きく膨らむもの。だから住まいは、なげない毎日の暮らしの喜びを感じられるようにすることが肝心な面倒だと感じていた作業を楽しみに変える仕掛け、小さな喜びを積み重ねていくこと



家族一緒に楽しみながらする作業は、  
幸せを実感できる大切な時間!

ができる住まい、ふだんの暮らしの充実こそ  
本当の幸せにつながるというでしょう。

## まず「家事(いへこと)」に着目!

ふだんの暮らしの充実を考える上で、まず着目すべきは家事です。家事といえば炊事・洗濯・掃除などをイメージしがちですが、もう少し幅広く「家事(いへこと)」と捉えることが肝心。たとえば、わが家のメンテナンスや日曜大工、家族アルバムの整理や季節イベントの計画なども含まれます。  
そして、この「いへこと」という呼び方には、これまでの家事をもっとポジティブに捉えて、「幸せ」につながるという思いがあり、「家のいろんな事」「家族みんなでする事」という意味を持っているのです。  
共働き家族が増え続ける現在、「家事は夫婦や家族で協力しあって行なうこと」という意識が当たり前。だからこそ、家族の誰もが家事をしやすい、一緒に楽しくできる住まいが必要であり、「幸せ住まい」への第一歩にもなるのです。